

## 九、最初の大作

一八五八年、エリゼは前章に記したような次第を以て、クラリス・ブリアン嬢 (Briant) と結婚した。ブリアン嬢は、あの有名なリエジ市國際大會に出席した勇猛な革命的學生仲間の一人であつたヂェルマン・カス (Germain Casse) の義兄弟である。エリゼは、最初はパリに兄エリイのところへ居り、次でヴァスクイユの義弟アルフレッド・デュメニル (Alfred Dumessnil) の家に同居していた。デュメニルは有名な歴史家ミシエレの婿であつたが、エリゼの妹のルイズと再婚したのである。マダム・デュメニルには筆者も親しくしたが、非常に明朗な婦人で、英・獨・兩國語に通じ、ロシア語も少しは讀め、エリゼの仕事には随分助力もし、後にはエリゼの子供達の世話をしてその養育方を引受けるに至つた。

エリゼは、ロンドンに創立せられた最初の國際労働協會に一八六四年に加盟したが、一八六五年以來、バクニンの周圍に兄エリイやその他の人々と『國際友愛會』という秘密結社を組織し、

次でバクニン派アナキストがマルクス派中央集権主義者に對抗して國際社會民主同盟を作つたので、エリゼは前の國際労働協會を脱退した。彼は勿論バクニン派を好んだのであるが、その同盟に加入するには至らなかつた。この當時、別に『平和と自由の連盟』という國際團體があり（ピクトル・ユーゴーが會長であつた）、ルクリュエやバクニンはその委員であつたが、一八六八年のベルン大會に於て少數派たる彼等は遂にこの連盟を脱退するに至つた。この時のエリゼの演説は、彼が公衆の前で無政府主義を公演せる最初のものだと言われる。この時の事情は後段の『最初の無政府主義演説』の章に詳記する。この時分のことである、彼がその若い妻君クラリスの死去に會ひ、二人の兒女を遺されたのは。

一八六七年には、彼の科學的著作のプランが既に構成せられた。それは普通の學者のように書齋に於て作りあげたものではなくて、ジャン・ジャック・ルソーや、大畫家のように、大自然の中に於て成案せられたものであつた。エリゼは言つてゐる「私は自由人として世界を馳け廻り、無邪氣にしてしかも自負心を有する一隻眼を以て自然を凝視した。古代のフレヤ（スカンデナビヤの愛の女神……石川）が大地の女神であると同時に自由のそれであることを想起しつつ」かくて彼

の最初の大作『地』の第一巻が一八六八年に公刊せられた。それは全卷陸地の研究を以て充たされ、その翌年に脱稿せられた第二巻に於て太平洋の研究が發表せられたのである。この大作に説くところは、地球の構造とその進化との高等考察であり大總覽である。そして、この二巻の書に含まれた支配的思想は、吾々の生活するこの地球が生きたまものだということである。人間は勿論その全體の一部分をなし、植物も動物も同様であり、是等すべての生活は緊密に結ばれ、共通的、連帶的である、とするのである。リッテル（ドイツの人文地理學者、エリゼの師）は、人類と地球との調和を以て一種既定の運命と見做すのであるが、ルクリュエはそこに一種進歩的の適應作用を認め、それによつて社會團體は自然の束縛から解脱し、次で人間はまた社會的束縛から解脱する、と見たのである。

この一八六八・九年の二ヶ年間に、エリゼは右の如き傑作を出したに係わらず、なお『兩世界評論』に協力したり、『政治評論』(Revue Politique)や、『協同事業年鑑』(Almanach de la Coopération)やに論文を寄せ、更に『フランス町村辭典』(Dictionnaire des Communes de France)に素晴らしい序文まで書いてゐる。なおここに特筆大書に値することは、フランス文學

の最高純粹なる傑作の一とせられる『或る小川の歴史』(Histoire d'un Ruissseau) がこの間に書かれたことである。この書は、後の同じ傑作『或る山の歴史』(Histoire d'une montagne)と共にパリ市が、その管内の學校生徒達に褒賞として頒布したほどのものであり、又その一部分は教科書中にも採録されているのである。それは小川の泉を發してより太平洋に瀉ぐまでの變遷の歴史を、文明の進展そのものに對比して描寫したもので、眞にみごとに散文詩として周ねく文學界の稱讚を博したものである。

これに就いてブリュッセル新大學の總理ド・グレフ博士 (de Greef) は『エリゼ・ルクリュ追頌講演』(Eloge d'Elisée Reclus) に於て次のように言つてゐる。「この方法を彼は後の『新世界地理』にも應用した。殊にヴォルガ河、ニヂェル河、アマゾン河等に。野蠻な原始民族は、最初、泉の湧出する高原に社會を形成し、次でその文明は、小川・大河の流れに沿うて江海に太平洋に進むに従つて擴大し、遂には世界的社會を構成するに至る。かくの如く、常に地理學と關連諸科學との結びついた社會的達觀は、その精美なる描寫と相和してまことに偉觀を呈している。エリゼは、ジャン・ジャック・ルソーの如く、ゲーテやシェラーの如く、自然への眞の愛情を持つてゐる。この自然への愛情こそ、われ等をしてその必然的進化と革命とを諒解せしめ追求せしめるも

## 一〇、インタナショナル・コミニオン

われわれは茲に於て、ルクリエ兄弟のパリ・コミニオンに於ける活動を研究せねばならぬ。冒頭に書いたように、エリゼが此のコミニウンの一味として銃殺されんとして免がれ、遠島流刑に處せられたが、世界的抗議の結果再び減刑せられて十年間の追放刑に處せられたことは、エリゼの生涯に重大な影響を及ぼしたからである。しかるにこのコミニウンの蜂起を検討するには、先ず第一の國際労働協會へのフランス代表者参加のことから知らねばならぬ。

ナポレオン三世の政府が赤色者狩に狂氣じみた努力を續けたことは、前にも述べた(クーデタの項に於て)が、それにも係わらず、機械産業の急速な發達は澎湃たる労働階級の運動を益々助長し、ブルードン學徒殊にトラン (Tolain) の如き有能人物の指導によつてその勢力は深く根を卸すに至つた。ところでナポレオン三世は自ら人道主義を臭わせ、民衆の向上的努力には同情を表明するといふ様な人であつた。それはまた、此の鬱勃たる勢力を壓倒し得ないことを知ると同

時に、一そこの新興勢力を自分に引き着けようとするに至つた結果でもある。またブルジョアジーの共和主義を極端に彈壓すると、それは却つてオルレアン黨(オルレアン家の王統擁護者)の利益に於て結果するということも考えねばならなかつたので、それも労働團體に心を注ぐ原因になつた。たまたま一八六二年、ロンドンに世界博覽會が開催され、前記トランに引率された二百人のパリ労働者代表が之を訪問することになつたので、國家はその費用を給與した。この事があつてからは、公けに労働者の相互共濟會が組織され、その連合もでき、出版物による宣傳も行われるようになった。パリ労働者のロンドン訪問は計量すべからざる意義と成果とを持つていた。第一に英・佛兩國プロレタリアの間に深甚な友愛關係が成立した。一八六四年七月二十二日、ロンドン労働組合主催の殉難國ポーランド聲援大會に出席せるトラン、ペラシオン、リムザン等に對する熱烈な歓迎の如き、最も能くこれを表明したものである。九月二十八日のロンドン會議に前記三名が出席した際には、トラン自ら發言して、自由制度の國に於ても、資本主義の専制に苦しむもの多きことを主張し、且つ單に英・佛兩國の労働者のみならず、全世界のプロレタリアの間に、鞏固な同志愛を恒久的に樹立する爲に準備せんことを誓つた。彼の演説は拍手喝采され、次で二十一名の委員が選ばれて協會規約の起草を委嘱された。『労働者國際協會』はかくて成立し

たのである。

三ヶ月の後、フランスの事務局がパリのグラヴィリエ町四番地に設けられ、それと同時に地方にも多くの支部ができて、一八六五年の始めには會員數五百或は六百名を有するに至つた。エリゼ・ルクリュがこのインタナショナルに加盟した蓋しこの當時である。一八六六年九月三日に、國際協會最初の大會がジュネーヴに開かれ、翌年九月二十八日にはローザンヌに於て第二回大會が開かれ、いずれにも多くのフランス代表が出席して熱烈な革命的演説を試みたが、之を知つたナポレオン三世とその側近者等は、漸くその最初の英國訪問を助けた以來の寛大な處置の誤謬であつたことに氣づくに至つた。かくて帝國政府は方針を改めて自由主義ブルジョアジイに接近するようになった。一八六八年三月インタナショナルのパリ委員等は訴追され、その十三名は悉く非合法的團體を創成し指導した罪によつて各百フランの罰金に處せられ、協會は解散の宣言を命ぜられた。(十一月十二日)その翌年三月六日第二の委員が選ばれたが、その委員達もまた訴追されて各員各三ヶ月の禁錮と罰金百圓に處せられた。この二つの裁判事件は夥だしい協會員の参加を促がし、種々なる傾向の民主主義者をしてこの運動に馳せ參ぜしむるに至つた。以上の二年間(裁判の行われた)にパリの労働者街や、他の主要な中心地に、公開の集會が盛んに行わ

れ、ブランキストやブルドドン派の人が多數そこに押寄せて之を激勵し、またフリーエ主義者やピエール・ルルーの一派も之に和した。更にリカマリーやオーバンに於ける同盟罷業の反響は、またもの凄く、人心を激昂せしむるに至つた。こうした時代に、ナポレオン三世は、皇后の壓力の下に、民主主義や労働階級に對して一層重大な計畫に身を投ずるに至つた。それは即ちプロシヤに對する戦争開始である。勿論これはナポレオンの虚榮心によるものではあるが、またピスマークの陥穽に引かかつたのだとも言われる。それはフランスに對して殘虐な重荷を與えたのみならず、ドイツ人民に對しても其の他の人類全體に對しても、慘憺たる痛撃を負わす結果となつたのである。

數日又は數週間でパリからベルリンへ勝利的散歩をするのだというナポレオン及び其の取巻連の夢は、セダンの大敗によつて脆くも消え去つた。國民防衛政府が組織された日、その首長ガムベッタは、インタナショナルのパリ代表即ち労働組合會議連盟代表の訪問を受けた。その代表者の開陳せる要求は極めて穏和なもので、即ち、市政評議會の即時選舉、パリ行政の他都市同様化、司法官の被選資格、宗教費の絶止、言論出版の自由、集會及び團結の自由、全政治犯人の釋放復權、等であつた。芝居氣たつぶりなガムベッタは氣取つた語句で之に答え、更にその翌日は

區長・副區長の任命を以て之に答えた。この處置を一種の挑戦と見たのはインタナショナルの會員のみではなかつた。ブランキストとジャコバン黨員もまた憤激した。この三派の間には直ちに評議が行われた。その結果、各區に警備委員を設け、また各區から四名づつを出せる中央委員を組織することに決定した。中央委員局ではブランキストの戦術が勝を制し、十月八日には彼等の踏襲手段たる奇襲戦法を以て市役所を占領しようとしたが、それは滑稽なほど失敗に終つた。十月三十一日の奇襲は當に成功しようとしたが、この時パリはメツツの降伏を知り、またオルレアン黨のチエールが休戦條約を締結すべく包圍軍の承認の下に敵戦線を通して來着したことを知つた。オルレアン王家を擁護するチエールに對して共和黨が反感を激發したのは當然であつた。中央委員會は此の時の民衆全體の憤激を利用しよう欲し、之に奉仕する軍隊は市役所を占領し、ブランキは布令を發し始めた。しかし數時間の後、彼はその地位を去らざるを得なくなり、その翌日になると各監獄は收容者でいっぱいになつた。

かくて帝制下の最も暗黒時期が開かれた上、パリは飢と寒とに苦しみ始め、若し場末の窮民群がその常習の突破進撃を行つたならば、赤色共和制の樹立が不可抗的に實現されたかも知れないのである。しかし指導者達はその死力的闘争精神を挫折させることしか考へなかつた。一八七

年一月六日中央委員は世に赤色公示と稱せられる布告を發した。その結語に次のような語があつた。「帝制下から承續した九月四日の政策や、戰略や、行政は既に決審された。その地を人民に、その地をコムミュンに！」數時間の後、パリ總督トロシー將軍 (Trochu) は之に答えるに有名なブランクード「パリの總督は降参しないぞ」を以てした。

しかし、獨軍の包圍が解けて、ブルジョアの軍隊がその武器を棄て、その隊を解くや、人民軍はその武器を占領した。殊にその大砲を領有した。これは實に社會主義者が待望していた一大好機會であつたのである。巴里の武装を解除しようとするチエールの計畫が失敗するや否や、之に乗ずる叛逆運動は勃發した。しかし中央委員局が勢力を保持したのは、單に連合主義フエドリック・ミュンハイムと自治市政とを希望する急進黨と協同した爲であることを忘れてはならぬ。

一月十九日、少數な勇士達は西方市外に集積された障礙物を突破してヴェルサイユの諸門の方向に向つて押し寄せ、ドイツの大本營は辛うじて脱走する他に道を發見し得なかつた。數回の市廳攻撃の後、三月十八日革命黨は勝利してコムミュン(自治體)が宣言せられた。しかしその勝利が餘りに急忽であつたので、中央委員局はその勝利を確保し、當時手中にあつた十萬の兵力をヴェルサイユに急進せしむべき精神的用意ができていなかつた。翻つてヴェルサイユのチエール

の方には意氣阻喪した四萬の雜兵がいたただけであつた。中央委員が躊躇している間に、チエールは様々な奸策を以てパリの憲兵隊や帝制下の舊軍隊をかき集め、ビスマークがまた之に強力な援助を與えて、巨大な勢力をパリ奪還に差向けることができるようになった。之に反してコムミュン側の勢力は次第に減じて僅かに三萬五千の防守軍しか有しなくなつた。しかも此の間に於て、中央委員局は選舉施行(三月二十四日)を告示し、ブルードン派、ブランキ派、獨立社會主義者、ジャコバン黨等が選出されたが、不幸にして各派の間に論争があつて歩調を一にすることができなかつた。四月三日と四日の兩日に亘つての激闘はヴェルサイユ軍の有利に始まり、越えて五月二十一日にはポルト・ド・サンクルが包圍軍の爲に押し開かれるに至つた。

この流血の數週間に於ける犠牲の數は精確には判らないが、公報によれば、戦死者七千二百九十四人、無判決にて銃殺された者二萬九千八百四人、判決の後銃殺された者二十六人、と言われる。屍骸總數三萬七千二百二十四。次で二ヶ月間に全國の諸刑務所に分置された者六萬九百〇七人、内女子千〇五十八人、子供六百五十一人であつた。その中には遠島流刑に處せられたものも澤山にあつた。かくてパリの誇りであつた多くの工場はその労働者を殆ど全部喪失するに至つた。しかしかくの如くコムミュンの軍は破れたが、コムミュンは精神的に勝利したと言える。即

ちこの大犠牲によつてフランスに於ては王政復興は到底不可能なことを明示したのである。

パリのコムミュンに應じてマルセイユ其他の諸都市に於ても、民衆は自治を標榜して蜂起した。無政府主義者バクニンは、この時、佛南諸地方に大いに煽動的活動を試みた最も有力な一人であつた。またこのパリ・コムミュンが國家間の戦争を契機として勃發したに係わらず、その運動の精神が世界的性質を著しく帯びていたことは特に注意すべきである。其の市會に、行政廳に、また軍隊司令部に、多くの外國人が加わつていたことは、頗る驚異に値すると言わねばならぬ。自らこの運動に加わつたエリゼ・ルクリュは言つてゐる。

「この時のパリの様を見たる世界は、インタナショナルの宣言した諸民族友愛の理想が如何に活ける事實となつて顯現したかを、驚異を以て實驗することができた。ユージェン・ペルタン(Eugene Pellen)とか、クルベ(Gourbet)とか、さうような文士、美術家等は帝政下に於て、かのヴァンドム塔の倒壊を要求したが、パリの人民は、この塔が記念する前の敗北者(この塔はナポレオン一世が獨逸征服を記念する爲に建てたもの……石川)と同意見を以て之を破壊しようとした。今度の敗北國民等が、往昔の勝利の記念塔を大元氣を以て倒壊し、しかもそれが、今度勝利した侵入者に媚びるためではなくて、却て彼等を襲撃した同胞に對する友愛的同情と、

兩民族の主軸者や國王等に對する憎惡の情とを表明する爲であつたことは、實に未曾有の事實であつた。コムミュンの活動は、當時に於ては實に甚だ高き進化の地位を占むべきものと言わねばならぬ」(ルクリュ「L'Homme et la terre」V. 248—249)

このパリ・コムミュンの活動が、世界の勞働者に多大の感激を與えたことは蓋し蔽うことのできない事實である。殊にドイツの勞働者は、ベルリン、ハムブルグ、ハノーヴル、ドレスデン、ライプチヒ其他の大都市に於て、各々大會を開いて佛國同胞に對する熱烈な同情を表した。この時、ドイツ社會黨の領袖ベーベルの同國々會に於ける演說中に次のような言葉がある。「パリの闘争は先驅的の一小事件に過ぎない。ヨーロッパの大紛争は吾等の眼前に迫つてゐる。皇宮には争亂あれ、伏屋には平和あれ、貪慾にして怠惰な者に死滅あれ、かのパリ人民の鯨波は、聽て全歐洲人民の更に猛烈な叫呼となるであらう」